

# GLA 随想 3 法の継承時の鍛錬

GLA を憂う元会員

2013年4月4日 第1版

# 目次

1	はじめに	1
2	前提となる神理	4
2.1	意識のシステムと魂の因果律との関係 . . . . .	4
2.2	止観シート of 因果律 . . . . .	5
2.3	第1の因果律の再考 . . . . .	6
2.4	第2の因果律の再考 . . . . .	7
2.5	魂の因果律の全体像 . . . . .	8
2.6	試練・煩悩・菩提心比例の法則 . . . . .	9
2.7	「完全な喜び」の実践について . . . . .	13
3	鍛錬の内容	15
3.1	S氏の事例 . . . . .	15
3.2	他の方々について . . . . .	18
3.3	鍛錬のさらなる意味 . . . . .	19

# 1 はじめに

法の継承時に起こった出来事については、GLA の元会員の方々が書籍、インターネットなどで様々な情報を発信されていますが、その中には、どのように受け止めさせて頂ければよいのか、迷いを感じる情報が多々含まれています。例えば、高橋信次先生から「あなたは大天使である」、「このままでは GLA はダメになる」、「僕はこんなつもりで GLA を作ったのではない」などと告げられたと主張する人が何人かおられます。

また、ある方は、信次先生から「GLA という組織を作ったこと、霊道現証を行ったこと、この二つは私の間違いであった」と告げられたと発信されています。その方は、「私は、信次先生の弟子として、師が間違いであったと仰ったこの二つは絶対にやりません」と言われ、生涯それ守られたという事です。

また、佳子先生に関する信次先生のご発言についても、人によって仰る内容が異なります。法の継承後も GLA に残っておられる方々は、「信次先生は、佳子先生がミカエル大天使であり、法の継承者であることを明言された」と異口同音に語っておられます。一方、GLA を去った方々の中には、「信次先生は、佳子先生はミカエルではないと明言された」、「後継者については『佳子にしようか、興和にしようか、一栄にしようか迷っている』と仰り、その中のどなたでも良かったような感じであった」と仰る方もおられるようです。

白浜研修会において、信次先生は、霊道現証の冒頭に「天上界の大天使長、ミカエルがここにきております。ただいまからこの女性の体を通して、ミカエルに語っていただきます」と仰いました。これでは、「佳子先生はミカエルではなく、単なる霊媒に過ぎない」という解釈も可能になります。このお言葉は、一部の方に対して「佳子先生はミカエルではない」と仰ったことに対して辻褄<sup>つじま</sup>が合うようにされたのではないかと思います。

信次先生の最後の御講演、すなわち 1976 年 6 月の東北研修会の講演録においても、次のような、理解が難しいお言葉が見られます。

「日本ばかりではありません。やがて私は中近東へ行きます。そして真の道を彼等は知るでしょう。」 「私は実業家として、後 4 年、5 年の

後においては、その面においても、世界でも知らん人がなくなるでしょう。当然なことです。それが道です。」

当時、信次先生は、相当に容態が悪化している状態であり、東北研修会についても周囲の方々の反対を押し切って赴かれたはずでした。東北研修会で語られた予言は、そもそも成就する可能性が無いことだったのではないのでしょうか。

信次先生が御帰天された後の、佳子先生のご発言について、GLA の元幹部の方々が発信されている情報にも、疑問を感じるものが含まれています。それは、例えば次のようなご発言です。

「信次先生の教えは必要ない」 「信次先生は、私を生むためにだけ出てきた人で、わたしが出た以上、信次先生は抜け殻である」  
「ミカエルに波動を合せなさい。あと五年後（1982年）には、全世界の人類はみなわたしミカエルの前にひざまずくのである。ミカエルに誓わないものは救われません」

そこで、本レポートでは、上述しました謎について検討してみたいと思います。佳子先生の御著書「天涙」の p291～p293 には、次のような御文章が掲載されています。

人に対する情に深い先生でした。人間的郷愁の強い先生でした。  
けれどもその優しさは、時に本人が対峙すべき闇をも包み込んでしまうこともあったのです。それまでの先生が弟子の抱える闇と業の問題について厳しく指摘されなかったのも、その優しさゆえであったように思います。先生は、ご自身がそうであったように、誰もが自ら自身で自我の引力に気づき、自ら砕くことを待たれていたのです。  
けれども、先生は優しさだけにとどまることを望まれませんでした。自我の傾きを曖昧にすることは魂の願い、魂が抱いてきた「約束」という中心をも曖昧にしてしまうことを痛感されたからです。  
ご自身の使命に揺るぎない確信を得てから、一人ひとりが真に自己を確立するために、比類ないほどの人間的優しさとともに人間の自我の傾きに対し

て厳しく対峙される姿を示されるようになったのです。

白浜研修会（昭和五十一年三月）で、またそれ以降、先生に接した人たちはそのことを少なからず実感されていたのではないのでしょうか。

けれどもその一方で、そうした先生の厳格な姿勢が、各々の中で迷いをあらわにすることにもつながりました。

また、私を後継者として証されたことで動揺した人たちもありました。先生と私をつなぐ親子の絆は容易に目に映りますが、魂の絆は見えにくいからです。時代の常識や価値観に大きく影響される人間の条件、そして誤解や不理解を引き出す忍土の条件を想えば避けられないことだったかもしれません。

しかし、先生にとってそれは、あまりにも脆い<sup>もろ</sup>信の姿であり、あまりにも弱い人間の姿でした。容赦<sup>ようしや</sup>のない<sup>にんど</sup>忍土の姿でした。

信次先生が語られた謎のお言葉は、上述の御文章の中の「人間の自我の傾きに対して厳しく対峙される姿」、「先生の厳格な姿勢」の具体的な内容であり、それは弟子に対する鍛錬のためであったと私は考えます。また、佳子先生が語られた謎のお言葉は、信次先生が実施された鍛錬を引き継がれたことによるものであると私は考えます。

但し、その事は、未だ GLA の中で説かれていない神理を前提にしなければ、説明することが困難です。そこで、まず先生が既に説かれた神理をベースとして、未だ説かれていない神理を説明させて頂き、その後、鍛錬の内容についての私の考えを説明させて頂きます。

## 2 前提となる神理

### 2.1 意識のシステムと魂の因果律との関係

「人間のまなざし 正念・人生の目的を刻印する」の78～82ページには、「意識のシステム」について解説があります。詳細は同書をご一読頂きたいのですが、人間の意識は「表面意識」、「想念帯」および「潜在意識」の三層に分かれており、それぞれの内容は次のようになっています。

- ・ **表面意識:** 感覚、感情、思考、意思の活動がなされている層。
- ・ **想念帯:** 人生の過去の出来事、自分では忘れてしまった記憶、習慣となってしまった行動、考え方、感じ方、自動回路などの条件付けの層。
- ・ **潜在意識:** 何度も転生を繰り返す中で獲得してきた智慧のエネルギー、業の力など個性を中心とした部分と、宇宙の存在が抱いている叡智のかげらが無数に漂っている共通部分とから構成される層。

一方、魂の因果律は、「魂」、「心」および「現実」の3つの要素から成り立っていますが、このうち人間の内面に属するものは「魂」および「心」の2つのみです。そうしますと、下表のように、魂の因果律における「魂」とは、意識のシステムにおける「潜在意識」に相当し、魂の因果律における「心」とは、意識のシステムにおける「想念帯」および「表面意識」に相当することが解ります。

魂の因果律	意識のシステム
魂	潜在意識
心	想念帯 および 表面意識

## 2.2 止観シートの因果律

私達は、止観シートの行に日々取り組ませて頂いています。止観シートでは、まず「出来事」に遭遇した時に表面意識に現れる感覚、感情、思考、意思の働きを見取ります。次に、その表面意識の奥に潜んでいる想念帯の「つぶやき」の内容を見取ります。止観シートの取組みを重ねてこられた方は、表面意識の働きは、実は想念帯の「つぶやき」が起こしていることを実感されているのではないのでしょうか。

この止観シートで見取ることのできる心の動きを「因縁果報」という視点でとらえてみたいと思います。想念帯の「つぶやき」が表面意識の働きを引き起こしているとする、「想念帯」が「因」になり、「表面意識」が「果報」になるのではないのでしょうか。そして、「出来事」は、因である想念帯の傾向またはつぶやきが表面意識に現れるための「縁」になるのではないのでしょうか。

この止観シートの因果律を図示すると、下図のようになります。

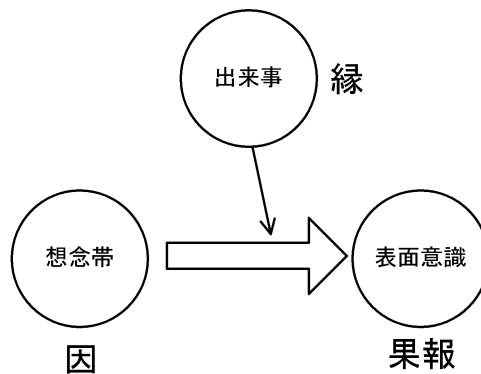


図1 止観シートの因果律

## 2.3 第1の因果律の再考

次に、魂の因果律の第1の因果律の内容を再考してみたいと思います。第1の因果律は、『「心」が「因」になり、「同志、原則、システム」が「縁」になり、「果報」として「現実」が生じる』という事を内容にしています。

しかし、先に「意識のシステムと魂の因果律との関係」にて検討しましたように、「心」は「想念帯」および「表面意識」から構成されています。第1の因果律における「心」とは、そのうち何れを指しているのでしょうか？

私達が煩惱の心で外界と関わると、外界には暗転の現実が生じます。しかし、想念帯の中に事態を暗転させる「つぶやき」を持っていたとしても、それが外に現れる前に「ちょっと待て」をかけることができれば、暗転の現実を未然に防止することができます。一方、「ちょっと待て」をかけることができなければ、感覚→感情→思考→意思の順に暗転のエネルギーが流れ、暗転の現実を引き起こしてしまいます。

そうすると、想念帯の「つぶやき」は現実に対して直接的な因果関係を有しておらず、現実を引き起こす直接的な「因」は表面意識であることが解ります。つまり、第1の因果律において、「同志、原則、システム」を「縁」として「現実」を生じさせる「心」とは、「表面意識」であるということになります。この第1の因果律の内容は、下図のようになります。

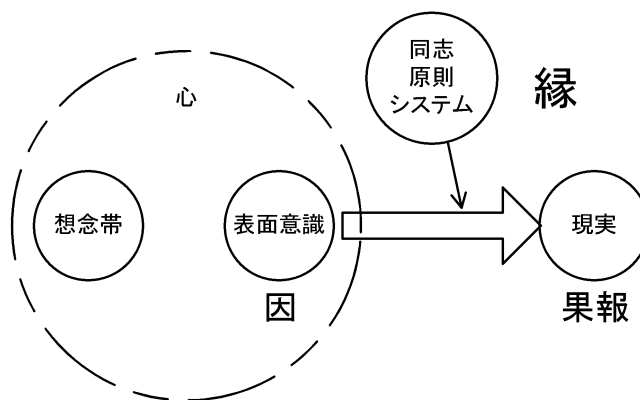


図2 第1の因果律



## 2.4 第2の因果律の再考

次に、第2の因果律の内容を再考してみたいと思います。第2の因果律は、『「魂」が「因」になり、「三つのち」が「縁」になり、「果報」として「心」が生じる』という事を内容にしています。第2の因果律における「心」とは、「想念帯」および「表面意識」のうち何れを指しているのでしょうか？

まず、因である「魂」は、私達が何度も転生を繰り返す中で形成されてきたものであり、その状態は固定的です。また、縁である「三つのち」は、私達が今生の人生で何十年もかけて引き受けてきたものであり、やはりその状態は固定的です。勿論、魂は成長させてゆくことができますし、三つのちは浄化してゆくことができますので、「全く状態が変わらない」というわけではありません。しかし、瞬間瞬間にコロコロと変わるものではありませんので、その意味で「固定的」なものであると思われます。

一方、私達の表面意識は、時と場に応じて、コロコロと簡単に変貌します。すると、表面意識は、「魂」と「三つのち」に対して直接的な因果関係を有していないこととなります。固定的な因である「魂」と固定的な縁である「三つのち」によって生じる果報とは、やはり固定的な「想念帯」ということとなります。この第2の因果律の内容は、下図のようになります。

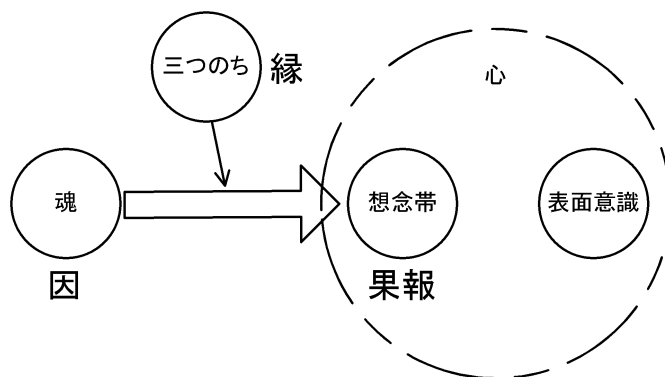


図3 第2の因果律

## 2.5 魂の因果律の全体像

これまでに掲げた図1～図3を重ね合わせると、下図のようになります。図1に掲げた「止観シート」の因果律は、魂の因果律の中に組み込まれ、いわば「第3の因果律」を構成することが解ります。私たちは、「因果律」という言葉を使っていなかっただけで、止観シートを通じて、既に第3の因果律に基づいて心を見取ってゆく鍛錬を頂いていた、ということになるのではないのでしょうか。

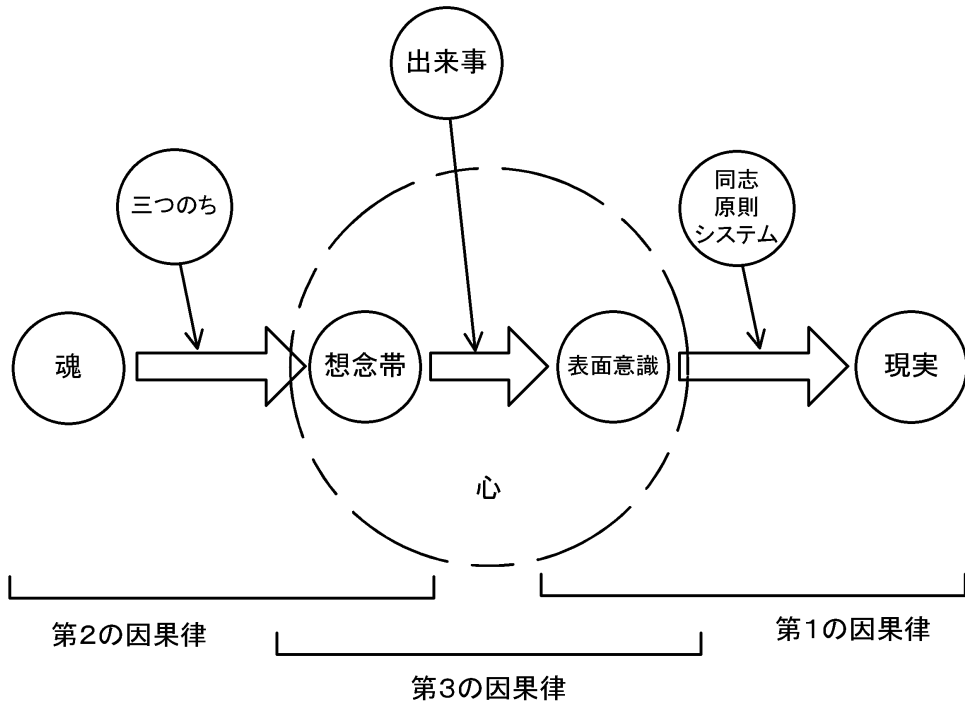


図4 魂の因果律 全体構成

## 2.6 試練・煩悩・菩提心比例の法則

私達には、時に試練が訪れます。試練が訪れますと、表面意識には煩悩が生じます。上述しました第3の因果律によれば、表面意識に煩悩が生じる原因は、想念帯の中に煩悩を生み出す傾き、あるいは「つぶやき」が存在するためです。「試練」というものは「出来事」の一種であって、第3の因果律においては、あくまでも「縁」に過ぎないことになります。

ここで、「試練の厳しさ」と「現れる煩悩の深さ」との関係を考えてみますと、試練が厳しければ厳しいほど、現れる煩悩も深くなることが解ります。すると、「試練の厳しさ」と、「現れる煩悩の深さ」というものには、比例関係が存在することになります。

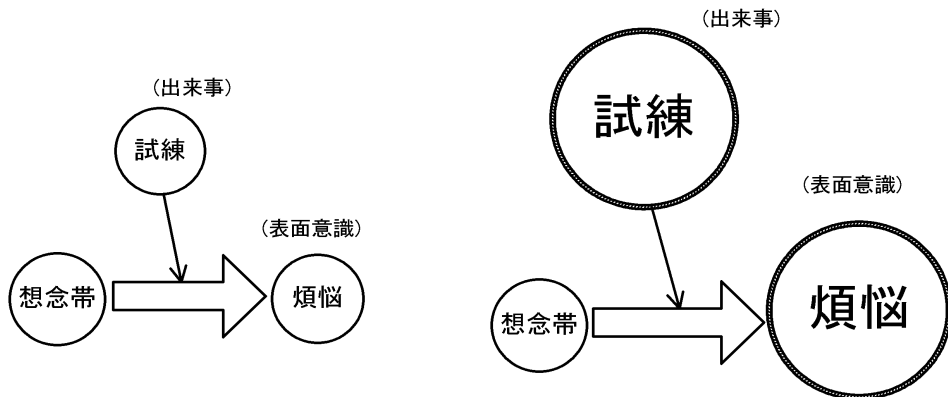


図5 試練の厳しさと煩悩の深さとは比例する

私達の表面意識に煩悩が現れているとき、その状況を脱却するためには、心を菩提心で満たしてゆく必要があります。しかし、深い煩悩にとらわれているとき、心を菩提心で満たしてゆくことは、なかなか難しいことです。そのことは、現れている煩悩が深ければ深いほど、その煩悩を克服してゆくためには、より力強い菩提心を発掘してゆかなければならない、ということになります。すると、「現れている煩悩の深さ」と、「発掘すべき菩提心の強さ」というものには、やはり比例関係が存在することになります。

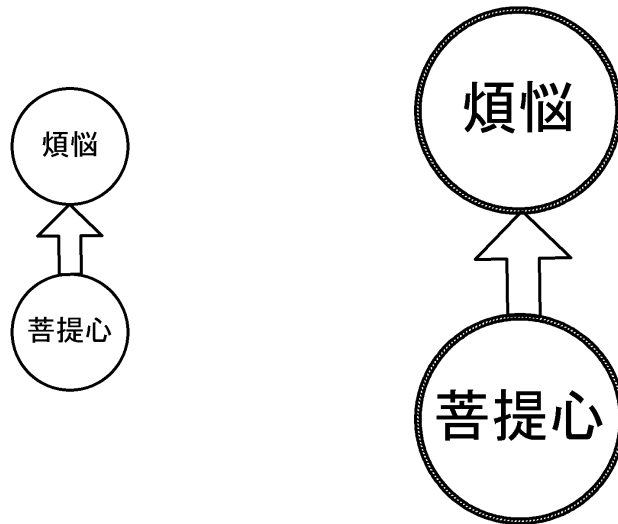


図6 煩悩の深さと発掘すべき菩提心の強さとは比例する

上述の内容をまとめますと、「試練の厳しさ」、「現れる煩惱の深さ」、「発掘すべき菩提心の強さ」の三者には比例関係が存在します。これが試練・煩惱・菩提心比例の法則になります。

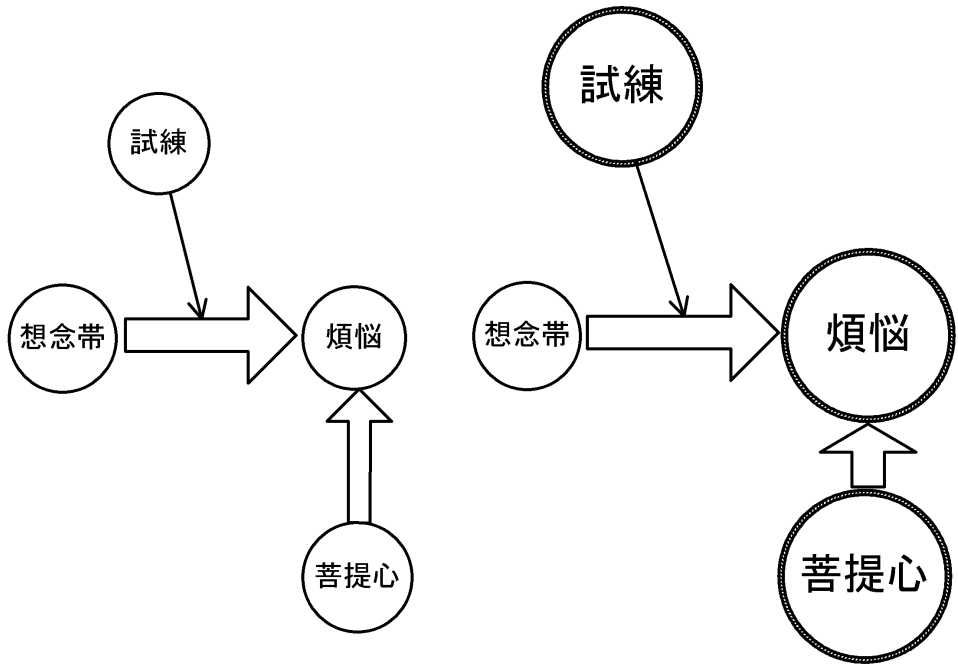


図7 試練・煩惱・菩提心 比例の法則

菩提心のエネルギーは魂から溢れ出てくるものです。それゆえ、「菩提心の強さ」とは、「魂の輝きの強さ」と言い換えることができるのではないのでしょうか。私達が力強い菩提心を発掘しようと努めるとき、そこには魂の成長を促しカルマを修復してゆく作用が働きます。それゆえに、試練というものは魂の成長を促すものであり、神の恩寵であるということができると思います。

アッシジのフランシスコが説いた「完全な喜び」の教えも、この試練・煩惱・菩提心比例の法則に符合するのではないのでしょうか。フランシスコとレオーネの対話から、最後の部分のみを以下抜粋します。

また、わたしたちが飢えと寒さと夜にせかれて、また戸を叩いて、お願いだから、せめて屋根の下に いれて欲しいと、涙ながらに頼んでも、門番は一層腹を立てて、『この恥しらずのごろつきめ、分相応の仕打ちを受けろ！』とわめいて、棒をもって飛び出し、わたしたちの頭巾をつかんで地面に引き倒し、雪の中を転がし、棒で所かまわずなぐりつける時、わたしたちはそれでも忍耐強く朗らかに全てに耐え、誉れ高いキリストの苦難を思い、キリストへの愛のために苦しむ事が、どんなにわたしたちにふさわしいかを、よく考える時— おお、兄弟レオーネよ、いいかね、そこにこそ完全な喜びがあるのです。

上記引用箇所のうち、「門番は一層腹を立てて、……棒をもって飛び出し、わたしたちの頭巾をつかんで地面に引き倒し、雪の中を転がし、棒で所かまわずなぐりつける時」というのは、「厳しい試練に遭遇し、煩惱が現れようとするとき」ということではないのでしょうか。

次に、「わたしたちはそれでも忍耐強く朗らかに全てに耐え、誉れ高いキリストの苦難を思い、キリストへの愛のために苦しむ事が、どんなにわたしたちにふさわしいかを、よく考える時」というのは、「その時こそ、煩惱に打ち克つ力強い菩提心を発掘することである」ということではないのでしょうか。

次に、「おお、兄弟レオーネよ、いいかね、そこにこそ完全な喜びがあるのです。」というのは、「それこそ魂の成長を果たしてゆくことである。魂の成長を果たすという喜びは、他のどのような喜びにも優るゆえ、完全な喜びなのである」ということではないのでしょうか。

## 2.7 「完全な喜び」の実践について

ここで、フランシスコが説いた「完全な喜び」についてももう少し検討してみたいと思います。フランシスコとレオーネとの対話は、御著書「二千年の祈り」や「レボリューション」に掲載されておりますし、過去にGLA誌にも何度か掲載されたことがありました。また、高橋佳子先生と個別の会員との対話御指導においても、この教えのことが時折話題になることがありました。しかし、先生が大勢の会員に向かって「完全な喜びを実践せよ」と仰ったことは一度も無かったと記憶しています。その理由は、「完全な喜び」の教えは難解であり、その教えを理解できる人と理解できない人がおられたからではないでしょうか。

この教えが難解であることは、フランシスコ自身も自覚していたのではないかと思います。「完全な喜び」の教えは公衆に向かって説かれた教えではなく、弟子レオーネとの一対一の対話において明かされた教えでした。フランシスコは、本当はこの教えを公衆に向かって説き、多くの人々に実践して頂きたいと願っておられたのではないかと思います。しかし、全員に理解して頂くことは無理なことであり、せめて理解できる人にだけでも理解して頂きたいと思われたのではないのでしょうか。

フランシスコとレオーネとの対話のお話を拝読しておりますと、「この教えは難解であり、誰にでも理解できるものではないが、レオーネであればきっと理解でき、実践できる。どうか理解できる人々だけでも、この教えを実践してほしい」というフランシスコの想いが響いてくるように思えます。しかし、「難解」というのは、フランシスコの説き方が難解であったということであり、説き方を変えると、多くの方々にとって理解・実践できる内容になるのではないのでしょうか。すなわち、「完全な喜びを実践する」とは、以下に示すことを日々果たしてゆくことであると考えます。

「試練に遭遇して煩悩が現れようとするとき（あるいは現れてしまったとき）、正にその瞬間を捉えて、煩悩に打ち克つだけの力強い菩提心を念じ現してゆくこと」

私達は、日々の営みの中で神理実践を果たしてゆくことが大切ですが、なかなか行に取組みにくい条件が与えられる場合もあるのではないのでしょうか。例えば、止観シートや祈りのみちを持ち込むことができなかつたり、勝手に手を休めて祈ることができない場合もあろうかと思えます。そのような条件下であっても、完全な喜びを実践することは、ほとんど支障なく果たしてゆけるのではないのでしょうか。



## 3 鍛錬の内容

### 3.1 S 氏の事例

私は、法の継承時に信次先生、佳子先生が語られた謎のお言葉は、弟子の鍛錬のためであると私は考えていますが、具体的にどのような鍛錬であったかということは、鍛錬を受けられたお一人お一人毎に、相違していたのではないかと思います。そこで、上述しました神理に基づいて、GLA の元講師であった S 氏の事例について検討してみたいと思います。S 氏は、法の継承時にご自身が体験された事を様々な形で発表されています。信次先生は S 氏が大天使であることなど、S 氏を持ち上げるような事を様々な仰ったようです。

信次先生が S 氏に対して、例えば

「あなたは偉大な人です。大天使〇〇です」

と仰ったならば、何が起こるでしょうか。そのお言葉を縁として、S 氏は自分自身のことを「大天使〇〇」であると思い込み、増長慢に陥ったのではないかと考えます。信次先生は、その様子をご覧になっても諫めるようなことはされず、増長慢を一層強めるように働きかけられたのではないのでしょうか。例えば、

「このままでは GLA はダメになります。

あとのことはよろしくお願いします」

と仰ったならば、どうでしょうか。S 氏の心はますます悩乱し、「もしかすると、佳子先生ではダメなのかもしれない。自分が信次先生の後継者として立ち上がらなければならないのかもしれない」とお考えになったかもしれません。

また、不確かな情報ですが、信次先生は講師、職員の方々を集められ、このようなことを仰ったということをお聞きしたことがあります。

「本当に心の綺麗な人が十人いれば世界は救われる。

しかし、十人どころか S さん一人しかいない。」

このように、信次先生は、S氏の増長慢を強めてゆくような事を仰り続けたのではないのでしょうか。しかし、信次先生が何を仰ったにせよ、それは第3の因果律においては「縁」に過ぎないものです。S氏の表面意識が増長慢で満たされたのであれば、その一切の原因はS氏の内側にあったこととなります。すなわち、S氏は元々増長慢を起こしやすいカルマを持っておられ、そのカルマが想念帯の歪として現れていたため、信次先生のお言葉を契機として表面意識に増長慢が生じたのではないのでしょうか。

おそらくS氏は、今生の人生を始める前に、「次の転生では、私は必ず増長慢のカルマを克服してゆきます。どうかその機会をお与え下さい」と神に願われたのではないのでしょうか。増長慢を克服するために具体的に何を果たしてゆくべきかと考えてみますと、それは『「完全な喜び」の実践』として前述しましたように、表面意識に増長慢が強く現れている時に、増長慢に打ち克つ力強い菩提心を現してゆくことにあります。

信次先生は、S氏との約束を果たすために、S氏の増長慢を強めてゆくような事を仰り続けたのではないのでしょうか。なお、当時は「菩提心発掘」という言葉は説かれていませんでしたが、「反省し心を浄化する」ことの大切さは繰り返し説かれていました。そのことは、「菩提心発掘」ということと同義であると考えます。

信次先生は、白浜研修会において、講師の方々に対して、「神の名において、増長慢は許しません」と語られたそうです。しかし、具体的にどなたが増長慢にやられているのかは仰らなかつたのではないのでしょうか。それは、増長慢にやられていることを自分自身で気付かなければならないからだと思われまふ。

その後、信次先生は御帰天される直前に、S氏のように煩惱に呑まれた方々がその事実に自ら気付けるよう、ヒントを与えて下さったのではないかと思われまふ。「はじめに」の節にて述べましたように、信次先生は、最後の御講演（東北研修会）にて、次のような予言を語られました。

「日本ばかりではありません。やがて私は中近東へ行きます。そして真の道を彼等は知るでしょう。」 「私は実業家として、後4年、5年の後においては、その面においても、世界でも知らん人がなくなるでしょう。当然なことです。それが道です。」

これらの予言は、信次先生が S 氏や他の弟子に語られたお言葉と関係があるのではないのでしょうか。それは、信次先生のお言葉に対して、意味をよく吟味することなく鵜呑みにしてしまう人が多かったため、鵜呑みにすることを戒められたのではないかと思います。最後の御講演における予言は鵜呑みにしようとしても到底鵜呑みにできないことであり、これは「私の言う事を鵜呑みにしてはならない。よく意味を吟味しなさい」と呼びかけて下さったのではなかったかと考えます。しかし、残念ながら、S 氏は最後の御講演における呼びかけにも気付かれることはなかったのではないかと思います。

S 氏が発信された情報によれば、信次先生が御帰天された後、佳子先生が次のような発言をされたということです。

「信次先生の教えは必要ない」 「信次先生は、私を生むためにだけ出てきた人で、わたしが出た以上、信次先生は抜け殻である」

「ミカエルに波動を合せなさい。あと五年後（1982 年）には、全世界の人類はみなわたしミカエルの前にひざまずくのである。ミカエルに誓わないものは救われません」

正直申し上げて、これらの佳子先生のお言葉に対して疑問に思われた方は多かったのではないかと思います。ただ、「自分は佳子先生よりも解っている」という増長慢を持っていけば、それは単なる疑問にとどまらず、「やはり佳子先生ではダメだ。自分が信次先生の法灯を継ぐ者として立ち上がらなければならない」という決心に繋がってゆき、「新教団を立ち上げる」という現実に結びついてゆくのではないのでしょうか。それは、S 氏の内側にあった増長慢の「空」が、誰の目にも映る「色」として、結晶化していったということにもなります。

もし、佳子先生が問題発言をされなかったとすると、S 氏は迷いながらも GLA に留められたのではないかと思います。その場合、S 氏はやがて佳子先生のお力を徐々に実感され、「自分は佳子先生よりも解っている」という増長慢は薄らいでいったのではないのでしょうか。しかし、それでは「増長慢のカルマを克服する」というテーマが曖昧になってしまいます。カルマを克服するためには、S 氏の増長慢を「色」の次元に結晶化させ、増長慢を克服するまで消えないようにすることが必要だったのではないかと思います。

従って、S氏がGLAを去って新教団を設立することはS氏がカルマを克服してゆくにあたって必要なことであり、佳子先生の問題発言も、その事を果たす目的があったのではないのでしょうか。法の継承直後の時期には、S氏の他にも、同様の理由によりGLAを去るべき方々がおられたかもしれません。その方々が全員GLAを去られた後は、佳子先生が問題発言をされることもなくなったのではないのでしょうか。

S氏は十数年前に逝去されましたが、その直前にご自身が設立された新教団を解散するとともに、ご自身の著書を全て絶版にされました。その理由については明かされなかったようですが、私はS氏が鍛錬の意味に気付かれ、増長慢を克服してゆかれたからではないかと推測しています。もし、私の推測が正しいとすると、S氏は、今生の人生では、出生前に最も願っておられたことを果たされたのではないのでしょうか。

### 3.2 他の方々について

S氏のご自身がGLAを去られるに至った経緯を著書などに書き残されたようであり、S氏と関係の深い方がその内容をインターネットで発表されていたこともあり、上述のように、S氏の鍛錬の内容に関して推測を進めることができました。しかし、他の分派の創設者の方々については、なかなか詳しい情報が得られませんので、私が単独で推測を進めてゆくことに困難さを感じます。そこで、S氏以外の方々については、「考えられる可能性」という観点から、いくつかの視点を提供させて頂きたいと思います。

かつてGLAの講師であったN氏は、法の継承時にGLAを去られ講演などを中心として活動されてきましたが、数年前に逝去されました。インターネット上の情報によれば、信次先生はN氏に対して、

「GLAという組織を作ったこと、霊道現証を行ったこと、  
この二つは私の間違いでした」

と告げられたということです。N氏は「私は、信次先生の弟子として、師が間違いであったと仰ったこの二つは絶対にやりません」と言われ、生涯それ守られたという事です。

このことから、N氏は快衰退の「依存—契約—癒着」の受発色を起しやすいカルマを持っておられた可能性があるのではないかと思います。このようなカルマを持っていると、「権威ある言葉」に対して、「深く検討することなく盲従する」という「契約」の行動を取りやすくなるのではないのでしょうか。

もし、この予測が正しいとすると、「回帰」の受信と「率直」の発信を果たすことがN氏に与えられた鍛錬ではないかと思われまます。すなわち、「もともと自分は何をしたかったのか」という願いに回帰され、その願いの視点から「GLAという組織を作ったことは本当に間違いであったのか」、「霊道現証を行ったことは本当に間違いであったのか」ということについて、N氏ご自身が智慧を尽くして結論を出され、出された結論に従って率直に行動を取ることが呼びかけられていたのではないのでしょうか。

### 3.3 鍛錬のさらなる意味

上述しました鍛錬の内容について、「少々厳しすぎるのではないか」と疑問を持たれた方もおられるかもしれません。この鍛錬を受けられた方は、二度とGLAに戻ってくることができなくなる可能性があり、事実、多数の方々もGLAに戻ってこられることなく今生の人生を終えられました。

では、鍛錬の目的を果たすことなく今生の人生を終えられた方々は、人生の時間を無駄にしてしまったのでしょうか。私はそうではないと思います。神理の体系が整う以前、特に1980年代において、佳子先生の法は、なかなか理解しづらい面があったのではないかと思います。「それでも、なんとか努力してついてゆきたい」と思える人はそれでもよろしいのですが、そこまでは思えない人は、信次先生の法に基づいて研鑽を進めて頂くしか方法は無かったのではないのでしょうか。そして、佳子先生と袂を分かって分派を設立された方々は、その役割を担って下さったのではないのでしょうか。

人間のまなざし「正命・出会いの神秘に生きる」の中に、この出来事に重なる物語『「まこと」を伝承する人々』が掲載されています。この物語によれば、九人の修行者が使命を抱いて旅に出ましたが、そのうち八人は様々な「心の弱さ」を呈して脱落しました。しかし、その八人はただ脱落したのではなく、「世界からの要請に応えた」という意味もありました。

このように、大いなる存在、神は一つの出来事の中に複数の意味を込められます。当時、GLA を出てゆかれ分派を設立された方々は、世界からの要請に応じて下さったのではないのでしょうか。

以上